

現代の学問と人心開発救済

望月 幸義

目次

- 一、序
- 二、適応としての理想的人間像
- 三、適応としての人間像（平均人・現代人）批判
- 四、自己実現の人間像
- 五、自己実現の人間像批判
- 六、最高価値実現の人間像
- 七、モラロジーと最高価値実現の人間像

一、序

人間のすべての活動は価値実現と価値増大に関わっているものと言っても過言ではない。この人間の努力をより有効にかつ確実ならしめるために、研究するものが学問一般である。

一般に開発とは英語のエンライトンメント (enlightenment) にあたり、これは開発・啓蒙等の意味の上に、文明、文化というような意味を含んでいとされる。このような広い意味での開発においては、すべての学問は開発とつながっているといえる。しかし、『道徳科学の論文』では、更に厳密に規定している。つまり「元来、文明人はもちろん、未開人でも、その精神と行為とは、おのおのその文明の程度に応じて開発されておるのでありま

す。しかしこの場合の開発というのは、前述のごとく文明より一歩進める程度の文明に向上せしむるという意味でなくして、その社会の文明の程度だけの開発でありますから、その価値は極めて少ないのであります。次に、宗教団体は人間の自覚を主とすることなくして、真理を強制的に信仰させるか、もしくはその宗祖のごときある人格を感情的に信仰させるものであれど、しかしその信仰を起さするに必要な程度だけは、人間の精神を開発するのであります。されば、人間社会においては、多少の開発の行われておらぬ所はないのであります。

しかるにいまモラロジの最高道德における開発の意味は、社会学者及び文明史家等のいわゆる今日の文明より一歩を進めたる将来の文明すなわち文化を造り出すところの本質的手段を指すのであります。すなわち従来の教育・宗教もしくは芸術等においては、人間を知的・道德的・宗教的もしくは芸術的に開発するに当たり、主としてある一つの主義もしくはドグマ等によっておるのであります。それ故に、その開発が一方に偏し、皮相的に陥るのを免れませぬ。もちろんかくのごときことは、もとより時代の然らしむるところにて、当然なことでありましょう。しかるにこのモラロジの実行的目的は、従来の経験・慣習・教育・宗教もしくは芸術等において開発されたものに対し、更に純粹正統の学問をもって、秩序的にその精神を知・情・意の各方面にわたりて、根本的且つ普遍的に開発して、古聖人の理想とせしところの至誠且つ慈悲の精神を有する人間を造り出さんとするのであります。」(⑧七一九)

このような意味での開発救済を扱っている学問および学者は皆無に近いといえるだろう。私が以下扱おうとするのは、価値の向上という意味でのもっと広い意味での開発救済を考えようとするものである。つまり既に述べたように、すべての学問が価値実現を求めているが、そこで求められている価値内容を、目ざされている理想的人間像として把握してみようとするものである。

これまでの理想的人間像追求には大きく二つの流れがあったといえる。即ち、哲学的方法と科学的方法である。哲学的方法としては、例えば、哲学、倫理学、(道德教育)などがあり、科学的方法としては、社会科学から自然科学に至る多くの学問が考えられる。ここでは便宜上、大きく(一)社会人一般が抱く理想的人間像、(二)適応としての理想的人間像、(三)自己実現的人間像、(四)最高価値実現的人間像の四つに分けて、その内の(二)、(三)、(四)、の一部について概観し、その内容を比較対照して、モラロジの人心開発救済の原理の特色と意義を明らかにすることにある。

なお、一言付言しておけば、私が以下探求しようとするものは科学的方法による理想的人間像の追求である。しかし、以下に述べることから分かるように哲学的方法と科学的方法は相補わなければならない面がある。

つまり、実現すべきものとされる価値は、科学的研究の結果として与えられるものではなく、逆に、科学的研究に方向を与える前提となるものであると同時に、人間が実現すべき価値として提示されなければならない面をもっているからである。

理想的人間像探求の諸方法

I 哲学的方法 哲学史、倫理学史、教育哲学史

道德教育(徳目、期待される人間像)等

II 科学的方法

(一) 社会人一般が抱く理想的人間像(社会学、政治学、心理学、経済学等)

(二) 適応としての理想的人間像(正常・健康な人間)

- ① ホメオスタシス論（平衡論）（ストレス、バイオリズム等）
生物学、生理学、医学
 - ② 成長（発達論） 発達心理学、教育心理学
 - ③ 平均的人間（良き社会人）（社会化） 社会学、政治学、経済学、教育学、行動科学等
 - ④ 健康な人間（正常な人間） 精神分析、心理学、精神衛生学等
（フロイト、アドラー、ハルトマン、エリクソン、ホルナイ、サリヴァン、ジュラード、コムズ&スニッグ等）
- (二) 自己実現的人間像
- ① 天才論
 - ② 人間学の一部
 - ③ 人間性心理学（ロジャース、オルポルト、フロム、マズロー）
 - (四) 最高価値実現的人間像 フランクル、W・ジエームズ、ソローキン、モラロギーにおける人間像
- なお、J・デルボラフ教授の『プラクセオロジー』における一二の実践それぞれについての規制的理念は参考になる。

二、適応としての理想的人間像

適応とは一般に、生物が環境に適合するように、自己の形体や習性を変化することを意味している。しかし、最近では、適応はもっと広い意味で用いられ、生理的平衡（ホメオスタシス）としての適応や、人間の心理的

成長段階や欲求に対する適応なども含めて考えられている。更に、上田吉一などは、一層広く、「われわれは、真の適応とは、このように現存社会のもつ外的規範に対する適応を意味するものではなく、自己の内面にはたらく人間性の法則に適合しているかどうかによると解したのである。つまり内面の声に忠実であるか、いかに人間性の法則に適った生活を営んでいるかという基準である」（『自己実現の心理』一八頁）と述べている。

社会的文化的適応は一般に正常・異常として扱われ、生理的・心理的適応は健康・不健康として扱われることが多い。従って、適応の概念は、正常・異常、健康・不健康の概念と密接な関係をもっている。

そこで、これらの概念の意味を明らかにしておく必要がある。

(一) 正常・異常及び健康・不健康

① 正常・異常

正常とは通常およそ三つの意味を含んでいる。

- (i) 最も頻度が高くあらわれるもの（平均的、標準的、最も一般的）。
- (ii) 医学的には不健康あるいは病的でないものをいう。
- (iii) 一定の価値尺度に照らして判断されるもの（社会慣習、伝統、その他）。

オルポルトによれば、正常という語の名詞形である *norm*（規範）は「権威的基準」を意味し、従って、正常（*normal*）とは、このような基準を遵守することを意味する。つまり、正常な人格とは、権威的な基準に従った行動をする人間であり、異常な人格とは、それに従わない行動をする人間である。しかし、正常と異常を区別するこのような基準には、全く異なる二つの基準が存在する。一つは統計的基準であり、もう一つは倫理的基準である。統計的基準は、平均的、通俗的なものに属し、倫理的基準は望ましいもの、価値あるものに属して

るという。(Chiang & Maslow, *The Healthy Personality*, p. 1.)

上記の平均的基準と倫理的基準が矛盾することが多いことは勿論である。つまり一般に行われていることが、価値的に望ましいことでないことも多いのである。

② 健康・不健康

懸田克躬は健康の意味について次のように述べている。

「精神の健康の概念についても、価値的な基準の常として、その評価者または判断者によってその内包を異にする危険性があるけれども、ほぼ一般的に容認される精神の健康の徴表としては、つぎのごときものをあげる事ができよう。精神障害がないこと、行動にいちじるしい異常性がなく安定性と柔軟性をそなえること、環境への適応が可能であり、しかも単に環境の要請に順応するのみではなく、積極的に、歴史的にみて正しい社会の発展に貢献する方向における適応が可能であること、パーソナリティの統合がよくなされていること、ならびに自己ならびに社会の認識を正しくなしていることなどである。」(千輪浩監修『臨床心理学』一二頁)

精神の健康・不健康は、上記にもあるように正常・異常とも密接な関係を持ち、価値的、主観的側面をもっているため、客観的な基準をもうけることはなかなか困難な問題である。以下に述べるトラメールの説は、健康・不健康をより厳密に定義しようとした試みとして注目できる。

トラメールは、その著『精神衛生学概論』において、心理的健康を実際の定義と理論的定義の二方面から考察している。ここでは実際の定義についてのみ触れる。

「實際生活で精神的に健康であるとは、それを意識しているにかかわらず、自分に正當的に期待される生活上の仕事に充分に満ちしている人間をいうのである。他の表現をとるならば、自分に対して社会共同体

から合理的に設定される心理的要請を満足している人が、心理的に健康であると認められる。

さらに、合理的であるとは、意識すると否とにかかわらず、人間が個体として、同時に社会共同体の一員として、その生命の保全と維持のために満足しなければならぬところの、人間に対する要請をいうのである。それらの要請を全部まとめると、一つのプログラムが出来上がるが、これをわれわれは生命プログラム(Vitalprogramme)と名づける。もしその中から絶対的に必要な最小限度の量とみなされる要請だけをとりあげるならば、それは最小限生命プログラム(Minimal-Vitalprogramme)とよばれるべきものになる。」

ここで生命プログラム(VP)とは次の引用におけるa、b、c、dのすべてを指し、最小限生命プログラム(MVP)とはa、b、cのみを指す。

- a 自己保持への本能と意志から行なわれる独立した生活保全と維持(原始的段階では食物獲得、防衛手段、身体障害の除去、高度の文化段階ではそれに適合した労働の実行)。
 - b 家庭をつくること、そして子供がある場合にはその発達の保全。
 - c 狭い社会共同体(家族)および大きい共同体(血族・部族・民族)への適応、それらへの参加または編入。
 - d 最小限生命プログラムを超えて生命プログラムは固有の文化財への関与、したがって精神的な拡大と充足、それと共に増大する自己展開と自己完成に関係する要請を含んでいる。」
- これらの定義の構成要素のうちa、bは個人的なものでありcは社会的なもの、dは個人、社会の結合したものである。

つまり、心理的健康とは、「その人の心が少くとも最小限生命プログラムを充足することができるような能力

をもち、さらにまたそれを事実上実現させている能力を示す人というのである。この能力には、知性・情動性・意志性の三つの基本的局面からの機能が属している。」

しかし、トラマールによれば、健康であることには、それ以上のことが含まれているという。即ち、上記MVP及び、VPの実現には、一定の心理的反響を伴い、トラマールはこれを内的気分(Binnengestimmtheit)と呼んでいる。「心理的健康のためにはこの内的気分が積極的なもので、活動を促進し生活を肯定するものであることが要求されるのである。」さらにこの状態は、瞬間的、短時間的なものではなく、持続的なものでなければならぬとされる。

(二) 精神分析学者等が描く適応としての理想的人間像の概要

フロイト・イド(エス)、自我、超自我の間に調和のとれた状態。又愛することと働くことのできる人間。¹⁾

アドラー…劣等感を克服する適度の優越欲をもった人間。更に社会的適応性をもった人間。自己の課題を普遍妥当な仕方で成し遂げる人間。²⁾

ハルトマン…自然から与えられた可能性を実現していく主体的な自我の適応のできる人間。自我の自律性を獲得している人間。³⁾

エリクソン…八つの発達段階に分けて、その段階での理想を考えているが、幼児から老人までの各段階で達成すべき徳目としては順次、希望、意志、目的、競争力、忠誠心、愛、育くみ、英知を挙げている。各段階はそれ以前の徳目を適切に実現していることが必要とされているから、成人の理想像としては上記の諸徳目が統一的に調和をもって実現されている状態と考えることができよう。⁴⁾

ホルナイ…①自分自身に対して責任をもつことのできる人間。

②明確な価値観をもち、他人を尊敬できる人間。

③みずみずしい感情をもち、それを自由に表現できる人間。

以上の三つを包括するものとして誠意をもった人間。⁵⁾

サリヴァン…自分と他者とを等しく尊重し、社会の秩序に矛盾することなく、自分の行ないたいことを自由に行なうことのできる人間。又対人関係における適応ができている人間。⁶⁾

ジュラード…真の自己を開示することのできる人間。(self-disclosure)⁷⁾

コムズ&スニッグ…①自分自身を肯定的に認識すること。②自己の知覚的な場の中にあるどんな認知内容でも、それを全面的に受容し、統御できること。(北村晴朗『自我の心理』二二六―七頁)

なお、ヤホグは、種々の精神的健康を比較検討した結果、次のように精神の健康の概念をまとめている。

「精神の健康という概念を明らかにするために、もっと広くさまざまな異なった接近法の検討が必要と考えて、ヤホグは、主要な考え方をすべてとりあげて考察した結果、精神的健康は大別すると六つの方向から接近できるとの結論に達した。それらは、①個人の自己への態度、あるいは自己認知様式が、どの位適切で受容的か、あるいは自己について満足し、肯定的な感情をもつか、同一性の感覚の程度はどうかという角度。②個人の成長、発達自己実現(能力の活用、未来への志向、精神の分化度、外界への関心、他者との関係、仕事や他人や理念への関心)、③統合(つまり心的な諸力の釣合いがとれており、統一された人生観をもっていて、ストレスに抵抗しうる)、④自律性(内面化された基準にもとづいて自己内部から行動を統制して行為の決定を行ないうる力、および物理的、社会的な環境条件に左右されることなく比較的それらとは独立に行為しうる決定能力、以上の一方もしくは両面を備えていること)、⑥欲求によって歪められることの少ない現実認知と共感もしくは社会的感受性の豊

かき、⑦環境に順応し、しかもそれを克服しうる力（A精神的・身体的に異性を愛し、自他を満足させる能力、B愛と仕事と遊びとを調和的に享受しうる力、C他者とのかわりにおいて相互に満足し、つながりと交流と喜びを味わいうる能力、D状況の妥当な要請にこたえることができること、E内外の現実を随時必要に応じて改変しながら両者間の調整ができること、F適切な認知、見通し、感情、手段をもって問題の核心に迫り、これを解決すること）、などである。」（『心理学の基礎知識』三四八頁）

三、適応としての人間像（平均人・現代人）批判

（一）現代人の特色、現代人生成の原因、現代人批判の文献は哲学者によるものから自然科学者によるものまで膨大なものがある。

（二）オルテガは、「大衆とは、善い意味でも悪い意味でも、自分自身に特殊な価値を認めようとはせず、自分は『すべての人』と同じであると感じ、そのことに苦痛を覚えるどころか、他の人々と同一であると感ずることに喜びを見出しているすべての人のことである。（中略）今日の特徴は、凡俗な人間が、おのれが凡俗であることを知りながら、凡俗であることの権利を敢然と主張し、いたるところで、それを貫徹しようとするところにあるのである」（『大衆の反逆』）と述べているが、これはD・リースマンのいわゆる他者志向型（others-directed）と同じである。フロムが市場的志向として述べているものと同じであろう。つまりフロムは、「使用価値より交換価値を強調する市場的価値概念は、人間についても、特に自己自身についても同じように適用される。自己自身を商品とし、自己の価値を交換価値として体験することにもとづく性格の構え（志向）を私は市場的構え（志向）と名づける。現代では市場的志向が急速に育ちつつある。」（『人間における自由』）と述べている。

（三）心理学者による適応としての人間像批判

①ラザラス（『個性と適応』）

「健全なパーソナリティにおいては二つの概念がある。一つはストレスのしるしのない満ちたれる牛的概念であり、もう一つは環境の支配とか目的遂行能力を強調するもので、前者の適応の本質は善良さにあり、後者の本質は自分の継続的な発達と自己実現にあるとする。」

②ユンク（『現代人のたましい』三八頁）

「『正常人』を理想の目標とあおぐのは、社会生活に順応することのできない人間、社会生活への順応の能力においても平均点にすら達することができないでいる人間である。ところが平均点をはるかに凌駕する能力をもった人間……にとっては、正常人……という観念……は……死ぬほど耐えがたい退屈の権化であり、不生産的な『希望のない地獄生活』の象徴である。」

③ジュラード（『透明なる自己』三二頁）

「ある社会的組織における正常性（役割同調）が次第に身体の病をつくりだすことも真実である（中略）。人びとがその社会的地位にふさわしい生き方を生きれば病気になるのである。」

④金子光男（金子光男編著『現代社会と道徳教育』六頁）

「イギリスの教育哲学者ニブレット（W.R.Niblett）は、現代のヨーロッパの大部分の人びとが、『人生の実務とは経済的に豊かになり幸福を手に入れることであると考え、そのためには、他人よりも多くのカネと権力を握ることであるという世俗的な人生観を抱いている』ことを指摘した。これはあたかも現代日本の異常ともいべき社会構造を支えている多くの人びとの人生観と同じであるということができよう。たしかに現

在は万事がカネの世の中のようにであり、それに強い権力を握れば、それが人生における成功と幸福への通路であると考えやすいかもしれない。しかしこのような人生観は、人間の心に精神的な怠惰を植えつけ、人生をまじめに努力する態度をなくしてしまふ。じつに現代社会にひそむ病理は、社会理想を犠牲にしてまで、物質的価値に注意を集中する点に存在する。今日真に必要なことは、人間精神の正常さを回復することである。」

四、自己実現的人間像

(一) 人間性心理学とは何か

人間性心理学についてのシャファアの説明を引用しよう。

「一九六二年に、マスローは心理学における第三の勢力(精神分析及び行動主義に対する)と考えていたものを表わすために協会の設立を提案した。この新しい学派は人間性心理学と呼ばれる。

生の価値、人生の基本的謎は、古くから芸術、宗教、哲学などにより、種々の仕方で解答が試みられてきたが、人間性心理学は、一九六〇年代及び一九七〇年代の人間の能力運動と一体化して、一連の技術を通して、非人間化する(疎外的)文化から人間を解放しようとする試みのものである。

アメリカの人間性心理学協会の条文には、

「人間性心理学とは、特別の学派あるいは領域の研究というよりも心理学全体の研究を志向するものである。これは個人の人格の価値を尊重し、研究方法の相違を尊重し、受容可能な手段に対しては常に開かれており、人間行動の新しい側面の探求に関心をもつ。現代心理学における『第三の力』として、現存の理論や制度には

ほとんど問題とされていない次のような問題を考察の対象とする。愛、創造性、自我、成長、有機的組織、基本的欲求の充足、自己実現、高次の価値、存在、生成、自発性、遊び、ユーモア、慈愛、自然なこと、暖かさ、自我の超越、客観性、自立性、責任、意味、フェアプレイ、超越的経験、至高経験、勇氣、その他の関連概念」と述べられている。

人間性心理学の主要な主張点は以下のとおりである。

①ヒューマニズムは非常に現象学的、経験主義的である。その出発点は意識的な経験にある。人間主義の立場によれば、意識的経験が主要で第一次的なデータとなる。人間性心理学はこの経験を神聖で侵すべからざるものとする。つまり、各個人は自分独自の感情と見地をもつ、侵すことのできない権利をもつ。しかし各個人の信念を尊重するということは、すべての見地が等しく妥当するというような道徳的ないしは知的相対主義を導くものではない。この経験主義的志向と相まって、人間性心理学は主観的心理学事象に強い関心をもつ。例えば、千里眼や超能力などである。しかし、人間性心理学は主観的事象に関心をもつからといって、科学的見地を放棄するものではない。なぜならば、人間性心理学は人間経験の科学を樹立することに関心をもっているからである。

人間性心理学は、意識を主要な関心事とすることにより、主観的経験それ自身に対する関心を回避する行動主義とは明白な違いがある。

人間性心理学は精神分析と主観的意識を問題にしている点では似ているが、精神分析では、無意識を強調するのに対して、人間性心理学は、意識それ自身で十分説明できると考える。

②人間性心理学は人間の本質的な全体性と統合性を主張する。

この全体性の強調は心理学の歴史においては、ゲシュタルト心理学の行なったことと類似している。

ゴールドシュタインはゲシュタルト理論の影響を受けて、同じような全体的考え方を人格と動機づけに適用した。ゴールドシュタインは「一つの非常に基本的な人間の動機づけは統一性と全体性に向けられている」と結論している。同様の考え方が G・オールポート、A・マスロー、C・ロジャースにおいて示されている。

これらの学者はゴールドシュタインの統一性への志向を「自己実現」という言葉におきかえている。

自己実現とは、個人の未だ実現されていない可能性を実現しようとすることであり、現在の自己とは異なるものになろうとする努力である。そう努力することによってより完全な人間になるのである。

人間性心理学によって、特に人間の潜在能力運動によって最近強調されていることは、心と身体の本質的一体性に対して特別の関心を払っていることである。人間性心理学者は、心理学があまりにも軽率に、身体的経験の重要性を軽視していることを真に憂慮している。

③人間性心理学は一方では人間存在には本来的に明確な限界があることは認めながら、他方では、人間が本質的自由と自立性を所持していることを主張する。

人間は少くともこのような限界を除去したり、超越しようと試みることができるし、又は、自分たちに課せられたこのような限界やその他の条件に対して態度決定を試みることができる。

④人間性心理学は、その研究方向からいえば反還元主義的である。

既に指摘したように、人間主義の内部では現象学的方法に非常に強い信頼がおかれているから、意識の経験があるがままに把握し、精神分析におけるようにこの経験的事実をもっと基本的な要求ないし防衛に還元したり、行動主義におけるように単なる副次的現象 (epiphenomena) に還元しようとはしない。この理由から、創

造性や博愛は純粋な現象であり、それを性愛的欲求の表現とみなしたり、欲求充足の初期の状態の反映である
とみなす必要はない。

⑤人間性心理学は、実存主義に大きな根拠をもつことと呼応して、人間性を完全に定義することは決してでき
ないと考えている。

人間性の限界が不確かなものであれば、その時人間のパーソナリティは無限に発展可能なものとなる。」

(John B.P. Shaffer, *Humanistic Psychology*, 1978, pp. 1-17.)

(二) 諸学者による自己実現的人間像

①ロジャース…十分に機能している人間

人間が潜在能力を人間有機体として発展させることができるようになればなるほど、彼のすべての能力はよ
り十分に表現されるようになり、信頼できるようになり、より社会化された人間となり、自己自身の発展お
よび人類の発展に役立つ人間になるものとして信頼されるようになる。つまり、これは最適な心理的適応、
最適な心理的成熟、経験に対して十分に開かれていることなどと同義語である。⁽⁸⁾

②オルポート…(イ) 自我の拡大。(ロ) 自己の客観視。(ハ) 総合的人生哲学。(ニ) 他人と暖かで深い人間関
係をもつ能力。(ホ) 人生の実際問題を処理する現実的な技術、能力及び知覚をもっていること。(ヘ) すべ
ての生きものに対して慈愛の念をもつこと。⁽⁹⁾

③フ ロ ム…生産的志向(構え)をもった人間。

生産性とは自分の力を用い、自分に本来的に備わった可能性を実現する能力のことである。つまり理性によ
って本質を理解でき、愛の力で人と人との障壁を突き破り、想像力をもち、創造できる人である。真の愛は

生産性の表れであり、配慮、尊敬、責任及び知識を含んでいる。

利己主義と自己愛とは同じものであるどころか実際には正反対のものである。¹⁰⁾

④ マスロー…自己実現的人間

1 自己実現的人間（より成熟した人間、より完全な人間）は、定義によって、基本的欲求は既に十分に満たしており、いまや高次動機と呼ばれるより高い動機に動機づけられている人間である。（自己実現的人間の定義に、A病気でないこと、B基本的欲求を満たしていること、C自分の能力を積極的に使用していることという条件に加えて、Dある価値に動機づけられていること、つまり、ある価値のために努力し、探求し、その価値に忠実に仕えていることを付加することが有益であることが分かった。）

2 このような人々はすべて、（自分以外の）何らかの課題、職業、天職、好きな仕事に献身している。

3 理想的な場合には、内的な要求と外部からの要求とが一致している。つまり「行ないたいと思うこと」と「行なわなければならないこと」とが一致している。

4 この理想的な状況においては、幸運であるという感情とアンビバレンツの感や無価値感が生じる。

5 この段階においては仕事と遊びの二分法は超越される。又、給料、趣味、休暇等々はより高次の段階で定義されなければならない。（もちろん、その時、このような人は、独自の人間となり、自己自身になり、真の自己を実現しているという意味で、真の意味で満たされた人間であるということが出来る。）

6 このような天職を愛する人は、自分の「仕事」と自己を同一視し（とり入れ、合体し）、その仕事が自己を性格づける特色となる傾向がある。仕事が自己の一部になるのである。

7 彼らが献身している仕事は、本質的価値の具体化ないし具現として解釈できるように思われる。（つま

り、仕事それ自身の外部にある目的に対する手段としてでもなく、又、機能的に自立的なものでもなく、その仕事を愛し、とり入れるのは、その仕事がこのような価値を具現しているからである。つまり究極的には愛するものは仕事そのものよりも、価値なのである。

8 このような本質的価値は存在（B）価値と非常に重なり合っており、恐らくB価値と同一である。

9 このとり入れ（introjection）は、自己が世界のさまざまな面を含むまでに拡大してきたこと、それ故に、自己と非自己（外部、他のもの）の区別は超越されていることを意味している。

10 進化の低い段階にいる人は、しばしば彼らの仕事を、低次の基本的欲求、神経症的欲求を充足させるため、目的への手段として習慣的にあるいは文化的期待に対する応答として使用するようみえる。しかし、これは程度の問題だろう。恐らくすべての人はある程度まで（潜在的に）高次動機に動機づけられているだろう。

11 人間ないし人間性の完全な定義は、人間性の一部として本質的価値を含まなければならない。

12 これらの本質的価値は本能的のものである。即ちそれらは、A病気を避けるために、B最も完全な人間性や成長を達成するために必要とされる。われわれは、本質的価値（高次欲求）の欠如から生ずる「病氣」を高次の病氣と呼ぶ。「最高の」価値、精神生活、人類の最高の願望は、それ故、科学的研究及び調査のための適切な主題である。これらは自然の世界に存在している。

13 豊かで甘やかされた青年の高次の病氣は、一部は、本質的価値の欠如、「理想主義」の挫折に由来しているし、又、彼らが、低次あるいは動物的ないしは物質的欲求のみによって動機づけられていると（誤って）考えている社会に対する失望に由来している。

14 このような価値の欠乏や飢餓状態は、外部のはく奪と我々内部のアンビバレンツや価値の対立に由来している。

15 基本的欲求の序列は高次欲求よりも優勢である。

16 概して、高次欲求相互間には勢力の序列は存在していない。つまり一般的な勢力の序列を見出すことはできない。しかし、特定の個人の場合には、これは特殊な才能又体質の相違によって、序列化され得るし、しばしば実際に序列化されている。

17 本質的な価値ないし存在(B)価値は、他のB価値のすべてないしその大部分のものによって十分に定義されているかのようにみえる。恐らく存在(B)価値はある種の統一体を形成しており、個々の特別なB価値は、別の角度からみた全体にすぎない。

18 価値生活(精神的、宗教的、哲学的、価値論的等の)は、人間生物学の一面であり、「低次の」動物的生活と(分離された領域や二分化された領域や相互に排除し合う領域にあるのではなく)同じ連続線上にある。

従って、存在するためには文化によって実現されなければならないとしても、この価値生活は恐らく人類に普遍的なものであり、文化を超越したものであろう。

19 快や満足は低次から高次へと序列化できる。従って快樂主義の理論も又、低次のものから高次の快樂主義へと序列があると考えることができる。

20 精神生活は本能的なものであるから、「主観的生物学」のすべての技術は教育に適用できる。

21 しかしB価値はB事実と同じであるようにみえる。そこで現実(reality)は究極的には事実—価値ないし価値—事実である。

22 人間は自然の一部であり、自然は人間の一部であるが、そうであるだけでなく、人間は又、自然の中で生存し得るためには、少くとも最小限度、自然と同一の構造をもって(自然と類似して)いなければならない。自然は人間を進化させてきた。従って、人間を超越するものとの人間の交わりは、自然でないものとしてあるいは超自然的なものとして定義する必要はない。それは、「生物学的」経験としてみることができるのである。

23 存在(B)価値は、これらの価値に対する我々の人格的態度と同一のものではないし、又これらの価値に対する我々の情緒的反応とも同一のものではない。B価値は我々の中に、「必要とされているという感じ」や「無価値であるという感じ」を生じさせる。

24 動機を記述する用語は序列的なものでなければならぬ。それは特に、高次動機(成長動機)を基本的欲求(欠乏欲求)とは区別して特色づけなければならぬからである。

25 B価値は主観的状态を生むことを要求すると共に行動による表現ないし「賞讃」(celebration)を要求する。

26 存在の領域(段階)を欠乏の領域(段階)と区別すること及びこれらの段階における言語の相違を認識することはある種の教育的利点と治療的利点がある。

27 「本質的良心」及び「本質的罪」は、究極的には、生物学的なものに根拠をもっている。

28 究極的宗教的機能の多くのものは、この理論構造によって成し遂げられる。(Chiang & Maslow, *The*

Healthy Personality, pp. 35-55.)

五、自己実現的人間像批判

(一) ベルランフイ(『人間とロボット』七〇頁)

「自己実現という観念はいつもかならず両刃の剣である。怪盗とか大探偵も芸術や科学での一流人物あるいは創造者などちよほど同じように、自己の可能性は充分に実現させたといってよいのだから。」

(二) フランクフルト「人間は、自分自身を充足し、そして実現するためには生きていなければならない。一般に人間の現在において自己充足や自己実現が問題になる場合、それらはただ結果として達せられるのであって、意図としてはありません。」(『精神医学的人間像』五五頁)

「生命の可能性は、単にできるといったような意味の平凡な可能性ではないのである。つまり、それは意味と価値の光に照らして認識されなければならないのである」(『現代人の病』五九頁)

(三) フロム「我々の価値判断というのは、我々の行動を決定し、そして我々の精神的健康や幸福は、その価値判断が妥当であるか否かにかかっているのである」(『人間における自由』四頁)

(四) マスロー「マスローは自己実現という言葉が次のような欠点をもっていると述べている。

(a)愛他的というより利己的な意味が強いこと。(b)人生の課題に対する義務や献身の面が稀薄なこと。(c)他人や社会との結びつきをかえりみないばかりか、個人の充実が「よい社会」にもとづいている点を看過していること。(d)非人間的な現実のもつ強要的性格や本質的魅力、興味を無視していること。(e)無我と自己超越の面がおざりにされていること。(f)それとなく能動性を強調し、受動性、受容性についておろそかにされていることである。わたくしが、注意深く努力して、自己実現をする人が愛他的で、献身的で、社会的である

などと経験的事実を述べても、これはそう受けとられるのである。「自己」という言葉は人を敬遠させるようである。それで再定義したり、経験的に説明したりしても、「自己」は「利己的」で単に自己中心的なものと考えられる言語上の牢固とした習慣に対しては、どうにもならないことが多い。」(『完全なる人間』四頁)

六、最高価値実現的人間像

(一) 自己実現的人間においては自己の潜在能力・可能性を実現することに力点がおかれ、それがどのような価値を目標とし、それを実現するかという面が十分でなかったといえるだろう。その点から上記引用のマスローの文章にみられる誤解も生じている。しかしマスローも述べているように、又、個々の人間性心理学に属する学者の理想的人間像の内容にも示されているように、必ずしも彼らの見解に価値的視点が欠如している訳ではない。しかしながら、最高価値実現的人間においては、より一層自我からの脱却と最高価値実現が強調されていると考

えることができるので、ここで分けて述べることにした。

価値実現的人間像を主張する学者のグループとして、人間性心理学の研究者を挙げることができる。つまり、上田吉一の「完全なる人間」、佐藤幸治「菩薩的人間」、岡本重雄「全人」などを挙げることができる。

又、ムーニエの人格主義も、価値実現的人間と考えることができるだろう。つまり、ムーニエは、人格社会を樹立するために、次のような人間像を期待している。

「(イ) 自己から出ること。……自己放棄の修業は人格生活の中心的修業である。(ロ) 理解すること。(ハ) 他者の運命、苦しみ、喜び、努力を吾が身に引き受けること。すなわち胸に痛みをおぼえること。(ニ) 与えること。人格の潑刺たる飛躍力は……寛大さ、或いは無償性であり、究極においては代償を予期しない無際限な恵与

である。(ホ)忠実であること。……人格の忠実性は創造的忠実性である。」(『人格主義』、クセジュ、四八―五一頁)

ここでは以下、フランク、W・ジェームズ、ソローキンの理想とする人間像を述べてみよう。

(二) フランク…価値実現の人間

人間は意味への意志をもった存在であり、常に自己があるべき姿を決定していく存在である。実存は本質的に自己超越にあり、我々は絶対的に最善のものに到達しようと常に努力すべきであるということになる。人間の独自性と唯一回性という実存的事実から責任性が生まれる。この責任性とは、人が人生にどういう態度をとるかということによって人生に答え、その答えにおいて自ら責任を取り、決断することにある。人は価値を認識し、実現するものである。人は何ものかのため、或いは誰かのため、即ちある大義のため、或いは友のため、或いは「神のため」先ず自分を失うところまで達してはじめて逆説的に自分を発見するのである。¹¹⁾

(三) W・ジェームズ…聖者性

「宗教が人の性格の中で成熟した場合それを包括的に呼ぶ名称が聖者性である。聖なる性格とは、神聖な(spiritual)感情が常に人格のエネルギーの中心となっている性格を意味する普遍的な聖者性の一種の複合写真ともいべきものがあり、これはすべての宗教において共通であって、その特色を取り出すことは容易である。その特色は以下のとおりである。

①この世の利己的で卑少な利害関係に満ちた生活よりも広大な生活の中にいるという感じ。つまり、理想的な力の存在を単に知的に理解しているばかりでなく、あたかもそれを感覚しているかのように確信している

こと。キリスト教の聖者性においては、この力は常に神として人格化されている。しかし抽象的な道徳的理想、市民的ないし愛国的ユートピア、神聖ないし正義に関する内的な信念などにもまた、私が「みえないものの実在に関する講義」の中で述べたような仕方での私たちの人生の真の主人であり、かつ人生を拡大してくれる者として感ずることができるのである。

②私たち自身の生命と理想的な力とが、密接に連続しているという意識、そしてこの力の支配に進んで従っていかうとする気持。

③閉鎖的な利己心の枠が溶けていくに従って、涯しない高揚と自由の気持をもつこと。

④感情の中心が調和ある慈愛に移動すること。つまり非我がもち出さずさまざまな要求に対して「否」(no)と言わず、「諾」(yes)と答える愛情に移動すること。

このような基本的な心の状況は、次のような独特の実際的結果をもたらす。

A 禁欲主義…自己放棄(self-surrender)は非常に高じると自己犠牲に変わることがある。その時自己放棄は肉体の欲求の通常の禁止をはるかに凌駕してしまつて、聖者は、犠牲と禁欲をより高い力への自分の忠誠心の程度を測り、表現するものとして、そこに積極的な喜びを見出す。

B 魂の力…生の拡大感が非常に高揚して、いつもは絶対的な力をもっていた個人的な動機や抑制は注目するに値しないものとなり、堅忍不拔の新しい地平が開けてくる。恐怖と不安は去り、至福に満ちた平安が訪れる。いまや天国がこようと地獄がこようと問題とならないのである。

C 清らかさ…感情の中心の移行はまず、清らかさを増す。精神的な不調和に対してより敏感になり、自分の生活を動物的で、官能的な要素から清めることが絶対的な命令となる。このような要素と接触する機会を

避けるようになる。聖なる生活は、その精神的充実性を深め、世俗の汚れに染まらないように保たなければならぬ。ある種の気質の人によっては、心の清らかさを保つ要求が、禁欲的な形をとって、肉体の欲求の弱さを容赦ない厳しきで罰することがある。

D 慈悲・感情の中心の移行は、第二に慈悲心の増加、つまり同胞に対する慈愛をもたらす。人間同士の愛情に狭い制限を置いてしまうことが多い反感への通俗的な動機が抑制される。聖者は彼の敵を愛し、汚らしい乞食をも兄弟として遇する。」(The Varieties of Religious Experience, pp. 226-269.)

(四) ソローキン・善き隣人たち、聖者たち

ソローキンのこの概念内容を示すものとして、『利他愛』より一箇所引用しておく。

「善き隣人たちの前述の役割を別にすれば、聖者たちの果たす社会的機能は、ある社会の最高の善・最高の愛・最高の精神性の生きた顕現である。聖者たちは、道徳上の価値の領域における創造的な英雄であって、その生きた亀鑑(模範)である。利他という領域では、大多数の聖者たちは「愛のエネルギー」の体得者であり、創造者であって、最も純粋な性質の愛を大量に産出するのである。これらの「愛を生みだすこと」の達人たちがいなければ、社会は必ずその成員間に友愛と調和が欠如し、破局を迎えるようになり、致命的な憎悪や闘争の氾濫に動きがとれなくなるのである。これらの「愛を生みだす」達人たちが出現する形式が宗教的であろうと、非宗教的であろうと、そのような非利己的な使徒たちが最小限度存在することは、どのように創造的で幸福な社会であつても、必要欠くべからざるものである。それは、あたかも生きるために必要な物質の生産において、エキスパート(その道の専門家)が必要欠くべからざるものであるのと、同様である。これらの聖なる使徒たちの愛の具体的な形式は変わるが、しかしその愛の実体は、永遠不変であり、不死不滅である。

すなわち愛と靈性の英雄なくして、いかなる社会も長期にわたる、幸福で創造的な生命を保ち得ないのである。」(二五七―八頁)

なお、同上書一二二―一二五頁、二五七―八頁及び二七四―五頁などはモラロジーとの関連からも重要であろう。

七、モラロジーと最高価値実現の人間像

モラロジーにおける理想的人間像は最高価値実現の人間である。そこでの最高価値は最高道徳であるから、その人間像は最高道徳の人間である。これの典型は聖人であり、その内容については『道徳科学の論文』第十四章に真に救われた人として具体的かつ詳細に述べられている。

以上、極めて不十分な諸人間像の概観であるが、それらとの対比において、モラロジーの最高道徳の人間像の色を挙げてみよう。

- ① 聖者の中でも最高の人物を対象としている。
- ② 最高道徳という到達すべき目標概念の内容が一層明確である。
- ③ なぜ理想的人間になる必要があるのかという理由についての説明がはっきりしている。
- ④ 人間の幸福実現という視点から考察しており、精神的幸福ばかりでなく物質的幸福も包含している。(この点でソローキンはモラロジーに一番近いといえる。)特に万世一系という視点は極めて規模雄大である。
- ⑤ 広池博士自身の長期に亘る体験を踏まえた上で立論されている。
- ⑥ 哲学から自然科学に至るまで、あらゆる学問、科学上の業績を考慮に入れて考察している。

⑦ 世界平和の実現という目標もより明確に示されている。

〈注〉

(1) フロイトの考える健康な人格とは、イド、自我、超自我のあいだに調和のとれた状態、つまり自我は超自我、イド、外界の三つの盲目的要求に対して調停者の役割を果たすことが可能である位に十分強い場合を健康な人格というのである。又、別の箇所では、フロイトは健康な人間とは「愛すること」と「働くこと」のできる人間であると述べているようである。(Chiang & Maslow, *The Healthy Personality*, p. 8)

なお、フロムが「精神分析学と禅仏教」においてフロイトについて次のように述べている点は、注目すべきであろう。「一般に考えられているとはまったく反対に、フロイト自身の体系は△病気▽と△治癒▽の概念を超えており、精神的に病んだ患者への治療だけに関するよりもむしろ人間の救済にかかわっているということを示したいと思う。(中略)

フロイトの目標は真実に関する最善の知識であり、それは現実の知識であった。この知識はフロイトにとって

人間がこの地上において持った唯一の導きの光であった。これらの目標は合理主義、啓蒙主義の哲学及び清教徒倫理の伝統的目標であった。宗教や哲学は、これらの自己統制の目標をユートピア的ともいえるやり方で要請したのに対して、フロイトはこれらの目標を(無意識の探求によって)科学的基礎の上に置き、従ってその実現への道を示したあるいは最初の人であると、彼自身信じた。(鈴木大拙、E・フロム、R・デマルティノー著『禅と精神分析』創元新社、一四八―九頁)

又、フロムは他の箇所でもフロイトの見解について次のように述べている。

「フロイトは精神の病気は道徳問題と切り離して考えることはできないことを発見した。つまり患者は自分の魂の要求を無視しているが故に病気になっているのである。」(E.Fromm, *Psychoanalysis and Religion*, Yale, 1950, p. 7)

(2) アドラーによれば、人間はすべて何らかの劣等感をも

ち、又、この劣等感を克服しようとする傾向をもっていう。これは優越性への努力(Striving for Superiority)であり、これが生きる目標を与え、人格の統一性を保つものとされる。又一方では人間は社会的感情をもち、この感情は優越欲よりもまさとされる。そこでアドラーの理想像は、社会的適応性をもった人間ということになる。アドラーは、社会的感情について次のように述べている。

「人類の存続を確保するために不可欠なすべての遊戯(競技)規則、教育、迷信、トーテムとタブー、立法はまた、第一に、社会の理念を遵守するものでなければならぬことが分かる。このことは既に宗教制度の箇所でも述べてきたが、教会の最も重要な機能の中に社会の要求が存在しているし、又、社会人一般の生活の中と同様に、個人の生活の要求の中にも、社会の要求が存在している。我々が正義と呼ぶもの、つまり人間性の良い面と考えるものは、本質的に人間の共同生活から生じる要求の遂行以外のものではない。それは教会が形成したものである。それ故、信頼、忠実、公明性、真理愛等は本来社会の普遍妥当な原理を通じて提示され、維持されてきた要求である。我々が、良い性質とか悪い性質とか呼ぶものは、社会という視点からのみ判断することができるものであ

る。これは、例えば、学問的性質の業績、政治的及び芸術的業績などが社会人一般に対して価値ないし有益性をもつ場合だけ、偉大なものとか価値あるものとされるようなものである。個人を判定する際の理想像は、社会人一般に対する価値ないし有益性という視点から判断してはじめて成立するものである。個人を判定する際の基準となるものは、社会的人間の理想像即ち、自己の眼前にある課題を普遍妥当な仕方でも成し遂げる人間、フルトシュラーの言葉を借りれば、「人間社会の遊戯規則に従う」程度までに、自己の内に社会的感情を發展させた人間の理想像である。社会的感情を育くみ、十分に実現することなくしては、人間は十分に成長しないのである。」(A.Adler, *Menschenkenntnis*, 1927, pp. 23-24)

(3) ハルトマンの自我心理学では、健全なパーソナリティは、自然から与えられた可能性を実現してゆく主体的な自我の適応力と考えられている。この適応には、葛藤状況に関連した過程と葛藤外自我領域に関連した過程とが含まれている。又、適応には環境改変的適応と自己改変的適応があるとされる。以下は『自我の適応』からの引用である。

「人の決定的適応は社会構造に対するものであり、その造成に共同することである。適応という語によって社会

の目標への受身的服従だけをいつているのではなく、社会的目的達成に対して積極的、共同的に働き、かつそれらの目標を改変する試みをも意味しているのである。」

「人間の適応性は大きい弾力性をもち、環境支配に役だつていくつもの方法がある。①個人・環境の平衡、②本能諸衝動の平衡、③精神諸構成部分の平衡、④自我の統合機能と自我の残余機能との中間にある第四の平衡、の四つの平衡が考えられる。」「自我の発達には分化である。自我の内におけるこの分化は、自我が強くて、この分化を自在に用いられる場合だけ最上の適応に至るのである。因果律的思考は、統合と適合だけでなく、分化をも含んでいる。分化は総合とともに、自我の重要な機能と認めなければならぬ。」「内的世界とその機能とは、二段階の適応過程を可能にする。つまり外界からの引き下がりとの支配力の向上によるそこへの帰還である。」「一般に知能は適応に役立つ。知能の現出は目的行動の発達上決定的な一歩である。」「精神分析は内面生活に向かう思考の最高度の発展である。そこで適応と適合とを修正し、調節するのである。」「価値段階は総合をなし遂げさせ、個人の適応にも役立ち得る。」「柔軟性と自動化とは両方も自我にとって必要であり、しかも自我の特性なのである。正常な自我は統制することができなければならない。

安などによっても禁止されていない、価値ある目的を心に描き、実際に追求する勇氣である。

④学童期(競争力)・競争力とは、幼児期的劣等性によって損われることなく、課題の完遂にあたって、道具や知能を自由に駆使することである。

⑤青年期(忠誠心)・忠誠心とは、避け得ざる価値体系の矛盾にもかかわらず、自ら自由に選んだものに忠誠を尽す能力である。これは同一性(identity)の基礎であり、堅固なイデオロギーや信頼に足る友はその源泉である。

⑥成人期(愛)・愛はその真の意味において、同一性と忠誠心の二つを前提とするのである。青年期を卒業したもののみが共に他に尽すという愛しみと無私の気持ちを持ち得るのであり、お互いに自らを賭ける場に愛が根づくのである。……愛は個々人の親密感を深めさせる。それゆえに、他人への倫理的な関与の基礎となる。

⑦成人後期(はぐくみ)・すべて成熟した成人は、自分が大事にし、価値をおいているものを伝え、しかも求める心でそれが受けとめられ、理解された時に感ずる満足感を知っているものである。そこでははぐくみとは、愛や必要のため、また偶然によって生み出されたものへの拡がる関心である。はぐくみは、放棄できない義務感に伴うアンビバレンツを克服する。

しかし自我はまた義務に従うことができなければならない。」「

(4) エリクソンによれば健全なパーソナリティ(環境を積極的に支配し、パーソナリティの統一性を示し、世界と自分自身とを正確に認識し得るもの)が形成されるためには、発達の各段階における課題が順次適切に達成されなければならないという。エリクソンは各発達段階において達成されるべき徳目の内容について次のように述べている。(『洞察と責任』誠信書房、一一〇—一三三頁)

①乳児期(希望)・希望とは、求めるものが得られるという確固とした信念である。たとえ存在の源初において、衝動や憎しみや暗闇に覆われているとしても。希望とは、個人のもつ信仰の基盤であり、これは成人のもつ信仰が生み出すはぐくみによって豊かにされる。

②幼児前期(意志力)・意志力とは、たとえ、幼児期における、避け得ざる恥や疑惑の体験をもちつつも、自己統制と同様に、自己の自由な選択の努力をする。不断の決意である。意志力は、法と義務とを受け入れる基盤であり、法の精神を体得した両親の公正な態度にその根をもっている。

③幼児後期(目的性)・目的性とは、幼児性の空想の挫折、罪悪感あるいは罰を受けるかも知れない絶えざる不

⑧老年期(英知)・英知とは、死に直面しながら、生そのものへ執着のない関心をもつことである。英知とは身体的な衰弱や知的機能のおとろえにもかかわらず、統合された経験を維持し、他に伝える努力である。また、後世への遺物を遺すため、来るべき世代への要求に答え、しかも同時にすべての知識が絶対のものでないことを自覚していることである。

(5) 健康な人格は自分自身に対して責任を引き受けることができる人間である。つまり自分自身の生活において活動的で、身をもって責任のある力を感じとり、決断をなすことができ、かつ結果を引き受けることができる人間である。このようなことができるようになると同時に他人に対する責任を受容できるようになり、自分がその価値を信じている責務を進んで承認することができるようになる。(子供、両親、友人、使用人、同僚、地域社会、国家のどれに対してもである)

また、健康な人格は、内的な独立性を獲得している。これは他人の意見や信念を単純に承認することもなく、又逆に簡単に無視することもなく内的な独立性を確立している。つまり健康な人格は、自分自身の価値の序列を確立しており、この価値の序列を実際生活に適用している。他人との関連でいえば、この人格は他人の個性と権

利を尊敬し、この内的な独立性が真の相互関係の基盤となるのである。これは真の民主主義的理想と一致するだろう。

また、健康な人格は、感情の自発性つまり、愛、憎しみ、幸・不幸、恐れや願望、何に關するものであれ、みずみずしい感情をもつ人である。これには自由に表現できる能力と自由に抑制できる能力が含まれている。以上三つを包括するものとして健康な人格は、誠意をもった人間である。つまり自己を偽わることなく、感情的に誠実であり、全力を挙げて感覚し経験し、仕事をし、信仰する人である。これは葛藤が解決される程度によって達成され得るものである。(Our Inner Conflicts, pp. 241-242)

(6) 以下は、サリヴァン著『現代精神医学の概念』(中井久夫、山口隆訳、みすず書房)より、サリヴァンが健康なパーソナリティ論を示していると思われる箇所を二、三引用してみたものである。「完全に人間的な状態とはどのような状態であろうか。それは自分をも自分以外の人間をも等しく尊重し、高い実績とそれに応わしい威厳とを備え、さらに「自分のやりたいことを行う自由」(the freedom of personal initiative)をもちながら、それが「自分の所屬する社会の秩序に特有の条件」に適應し、

(8) ロジャースの「十分に機能している人間」を示している箇所を引用しておく。

「十分に機能している人間はあらゆる感情や反応の一つ一つを十分に生きることができ、彼はできるだけ正確に内外の実存的状況を感じとるために、彼のあらゆる能力 (organic equipment) を使っているのである。(中略) 彼は自分自身であり、自分自身になろうとするプロセスに完全に没頭しており、かくて自分が健全でかつ現実的な意味で社会的であることを発見する。彼はこの瞬間に十分に生きているが、こうした生き方がいつまでも最も健全な生き方であることを学びとっている。彼は十分に機能している有機体であり、彼の経験を自由に反映する意識によって自由に機能している人間になるのである。」(『人間論』七三―四頁)

「人間がその潜在能力を人間有機体として発展させることができるようになればなるほど、彼のすべての能力がより十分に表現されるようになり、彼の機能がますます十分に働くようになると、私は彼がますます信頼でき

またそのことを気持ちのよいことと感じる、という状態である。」(同上書六三頁)

「人格というものは「文化への同化過程」による種々の不利を埋め合せながら、自分の精神的健康すなわち对人的適應成功の状態をめざして進む強い傾向をもつ。生物は基本的に前向きに進む方向性をもつものである。」(一一九頁)

「自己の対人関係の自覚と精神の健康は平行関係である。」(二三四頁)

(7) 自己開示はパーソナリティ健康の印であり、健康なパーソナリティを究極的に獲得する手段である。自己開示がパーソナリティ健康の印であると私が言うのは、健康なパーソナリティの特色であるその他の諸特徴の多くのものを表わしている人は又、自分自身を少くとも他の一人の重要な人に十分知ってもらい能力をもっているだろう、ということの意味している。

自己開示がパーソナリティの健康を獲得する手段であると私が言う場合、私が真の自己となり、真の自己として行動するようになってはじめて、私の真の自己は成長している状態にあることを意味している。一人の人間の自己は生きることの結果から成長するのである。人々の自己は、彼らがその自己を抑圧するとき、成長を停止す

るようになることに気づいている。人間がすべての経験に敏感に開かれていなければならないほど、人間は社会化されたとみられる方向へ動いていくようになる。人間が自分の内部および外部の刺激に対するいろいろな反応をより多く利用できるほど、人間は自分自身の発展および人類の発展に役だつ方向へ動くものとしてますます信頼されるようになる。そうした人間は人間進化のたえざる進展過程にふさわしい参加者なのである。」(同上書一〇八頁)

「十分に機能する人間」という言葉は、最適な心理的適應、最適な心理的成熟、完全な一致、経験に対して十分に開かれていること、完全な外在化などといった、すでに定義された言葉と同義語であることが明らかになったであろう。

以上の言葉は、このような人が、「すでに到達してしまつた」かのように、何か静的なひびきを与えるので、このような人の特徴はすべて過程的な特徴であるということを強調しておきたい。十分に機能する人は、「過程のなかの人間」(person-in-process)であって、絶えず変化しつづつある人である。それだから彼のひとつひとつの行動をあらかじめ記述する、というようにすることは、その行動はそれぞれ新しい状況に適切に順応して、その

人は絶えずさらに多くの自己実現をする過程のなかにあるということである。」「パーソナリティ理論」(二四五頁) 成熟した人格

一、自我の拡大—自分の身体及び物質的所有物以外のものに関心をもつ能力。この基準には、フロムが生産的人間に属するものとして挙げている属性が含まれていると思われる。

二、自己の客観視性—現在の経験についての感情を過去の経験についての感情—後者が実際に前者の質を決定すると仮定した場合—と関係づけることができる能力も含まれる。

自己の客観性には又、我々の生の全地平はあまりにも広大であつて、現在のよくな融通のきかない境遇に押し込めることはできないことを理解させるようなユーモアも含まれる。

三、統合的な人生哲学—これは必ずしも宗教的なものである必要はないが、とにかく人生の主要な活動にあてはまる意味と責任をもった一つの構造でなければならぬ。

四、他人と暖かく深い人間関係をもつことのできる能力—これは、「リビドーの外化」ないしは「社会的感情」(Gemeinschaftsgefühl) と呼ぶべきである。

五、人生の実際問題を処理する現実的な技術、能力及び

して、又行為者として自分自身を経験することであり、自己と自己の力が一体であると感ずる経験であり、同時にその力が隠されておらず、自分から疎外されていないと経験することである。(中略)

生産性とは人間に備った固有の可能性を実現することであり、自分の力の使用である。(中略)

しかし力とは何であろうか。人が自分の力を生産的に用いることができる能力が彼の力(potency)である。それを生産的に用いることができることが彼の無能力である。人は理性の力で、現象の表面を突き破つて、その本質を理解することができる。愛の力で人と人とを分離している壁を破ることができる。想像力で未だ存在していない事物を描いてみるることができる。人は計画することができ、そうすることによって創造を開始することができる。このような力(potency)が欠けている場合には、人の世界への関係は、支配欲つまり、他人があたかも事物であるかのように、他人に対して力を及ぼそうとする欲望に墮落してしまう。支配は死と結びついており、力は生と結びついている。支配は無能力から生じ、逆にそれを強化する。なぜならば、もし人が他人を強制的に自分に仕えさせることができたならば、生産的であろうとする自分自身の欲求は、より一層麻痺してしまうからで

知覚をもっていること。

六、すべての生きものに対して慈愛の念をもつこと—個々の人格に対する尊敬及び人間の運命を改善するような共通の活動へ参加する性向も含まれる。(Chiang & Maslow, *Healthy Personality*, p. 9)

なお、オールポートは「この他にも『個人と宗教』及び『人格心理学』において成熟の基準について論じており、それぞれ若干の相違がある。

(10) 生産的志向(productive orientation)の人間

「パーソナリティの生産的志向とは、基本的な態度のことであり、人間経験のあらゆる領域における関係の仕方のことである。それは他人、自分自身及び事物に対する精神的、情緒的、感覚的反応を含んでいる。生産性とは、自己の力を用い、自分に本来的に備わった可能性を実現する能力のことである。例えば、人が自分の力を使用しなければならぬと言ふ場合には、それは彼は自由でなければならず、彼の力を制限するようなどの人間にも頼ってはならないという意味である。更に又、彼は理性によって導かれるという意味でもある。なぜならば、彼は自分の力が何であるか、それをどのように用いるか、何のために用いるかを知りさえすれば、それを用いることができるからである。生産性とは、人がその力の具現と

ある。

人が自分の力を生産的に用いる場合には、世界とどのような関係をもつだろうか。

人は自分の外にある世界を二通りの仕方を経験することができる。即ち、一つは再生産的仕方であり、これはフィルムが事物の全くそのままの記録を撮影するのと同様に現実を知覚する仕方である。もう一つは生産的仕方であり、これは現実を理解し、自分の精神的、情緒的力を自発的に活動させることによって、この新しい材料に生命を与え、再創造するという仕方である。(中略)

正常な人間は世界をあるがままに知覚するとともに、自分自身の力で、世界に生命を吹き込み、豊かにすることによって、自分と世界との関係をつくることができる。(中略)

再生産的能力と生産的能力の二つをもっていることが、生産性のための前提条件である。つまり、これらは両極端であつて、これらの相互作用は生産性の活力的源泉である。(中略)

生産性のもっとも重要な対象は人間自身である。」

(*Man for Himself*, pp. 91-97)

「他人ばかりでなく我々自身が、我々の感情や態度の対象である。つまり他人に対する態度と我々自身に対する

態度は矛盾するどころか、基本的に連結しているものである。

(例えば)他人への愛と自分自身への愛とは、二者択一的なものでなく、逆に他人を愛することができるすべての人々の中に、自分自身を愛する態度が見出される。対象と自分自身の自己との関係が問題とされる限り、愛は原理的に不可分のものである。真の愛は生産性の表れであり、配慮、尊敬、責任及び知識を含んでいる。それは誰かに心を動かされたという意味での感動(affect)ではなく、愛する人間の成長と幸福のためになす積極的努力であり、自分自身の愛する能力に由来するものである。愛するということは、人の愛する力の表れであり、誰かを愛するということは、一人の人に對してこの愛する力を具現し、集中することである。(中略)

このことから私自身の自己は、原理的に他人と同様に、私の愛の対象でなければならぬという結論が導き出される。自分自身の生、幸福、成長、自由を肯定することは、その人の愛する能力に由来している。もしある人が生産的に愛することができるのであれば、その人は又、自分自身をも愛しているのである。もしその人が他人だけしか愛しないとすれば、彼は全然愛することができない人である。(中略)

であります。」

『人間は輩である』とパスカルは言いました。『しかし考える輩である!』と。人間の尊厳、各個人の尊厳を形成するのは、この思考能力であります。意識であり責任感であります。人がこの尊厳を保持するか、或いはこの尊厳を傷つけるかということは、各人の自由に任されているのであります。(一三四―三五頁)

「人の意味への意志は死、意味それ自体は本質的に単なる自己表現より以上のものとして説かれることによるのみ明確にされるのである。このことはある程度の客観性を意味し、最小なりとも客観性がなければ、意味は決して満たされる価値はないであろう。我々はただ物事に意味をくつつけたり、与えたりするのではなく、寧ろ意味を発見するのである。即ち、我々は意味を作り上げるのではなく、それを探求するのである。(私が意味の客観性と言うのはそれ以上の何ものでもない)しかしながら、その反面、公平に考察するならば、意味にはある種の主観性が含まれることも明らかになるであろう。生命の意味は、与えられた状況における個人の生命という特殊な意味によって把握されなければならないのである。それぞれの人間は皆独自であり、それぞれの人の生命は唯一つしかないものなのだ。誰も、他の人がとって代わるこ

利己的な人は自分自身にだけ関心をもち、すべてのものを自分自身のために欲し、与えることに何の喜びも感ぜず、取ることだけに喜びを見い出す。……彼は基本的に愛することができないのである。(中略)

利己主義と自己愛とは同じものであるどころか、実際には正反対のものである。利己的な人は自分自身を愛しすぎているのではなく、愛さなすぎるのである。実際彼は自分を憎んでいるのである。自分自身に對するこのよくな愛と配慮の欠如は、彼の生産性の欠如の一つの表現であるに過ぎないのであるが、これは彼を空しさと失望の状態にしておくのである。(同上書、一三四―三五頁)なおフロムは、その著『生きるということ』において、新しい人間の性格構造として二十一項目を挙げている。(同書二二八―二三〇頁)

(II) 以下『現代人の病』(丸善)から、フランクフルが考えている人間像、即ち、意味への意志をもった存在、責任性をもった存在、価値実現をする存在としての人間像に関する主要な記述をとり出しておく。

「人間とは何でありましょうか?人間とは人間であるべき姿を絶えず決定してゆく存在であります。人間とは動物の水準までなり下がることができると同時に、聖者の生活をおくるところまで向上できる可能性を持つもの

とはできないし、また、誰もその人の生活を再現してみることができないのである。この二重の独自性は人に責任性を付加させる。結局、責任性というものは、人が人生にどういう態度をとるかということによって人生に答え、その答えにおいて自ら責任を取り、決断し、自分に与えられた質問に如何に答えるべきかを決断することにある。つまり、責任性は、人生というものが人間が答えねばならぬ質問のつながりであるという実存的事実に由来する。そして私は、それぞれの質問には唯一の答えしかないし、しかもそれが正しい答えなのだと敢えて断言する。人は、どんな問題に對しても正しい答えや解決を探したり、その存在に對して真の意味を見出すことが、常に可能なのだというわけではない。寧ろ、その逆が真である。有限な存在者として、人はいつでも誤りをおかすと言うことから免れているのではない。従って誤りをおかす危険性に常に晒されなければならないのである。ここで再び私は次のゲーテの言葉を引用したい。『我々は常に金的な目指すべきだ―たとえ我々は常にそれを射止められるとは限らないことが判っていても。』このことをもつと碎いて言うならば、我々は絶対的に最善のものに到達しようと常に努力すべきだと言うことになる―そうしないと我々は相対的な善にさえ到達できないであろう。』

「しかし実存は本質的に自己超越にある。したがってそれは自己実現にあるのではない。即ち、人間本来の重要性は、自分自身の実現にあるのではなく、価値の実現や意味の可能性の充足にあり、その意味の可能性は自分自身の中とか、自分の内に閉ざされたものとしての心理の中に、と言うよりむしろ世界内に見出されるものなのである。」

人が実際に必要とするのは、恒常性ではなく、私が精神力学と呼ぶもの、即ち実現さるべき具体的な意味や、満たさるべき人格的存在の意味に向かって人を確実に位置づけることによって起こる当然の緊張なのである。」

(八四—八五頁)

「人は価値を認識し実現するものであると私は言いたい。人は何ものかのため、或いは誰かのため、即ち或る大義のため、或いは友のため、或いは「神のため」先ず自分を失うところまでに達して初めて逆説的に自分を発見するのである。人は、もし自分を越えた、つまり自分の上にある何ものかに自分を捧げてしまわない限り、自分自身とその主体性に対する努力は失敗してしまふように運命づけられているのである。ヤスパースは、こうしたことを次のように表現している。『人間とは何ぞ

や。人間は、自分自身のものと為した大義名分を通して人間となる。』(一〇〇—一〇二頁)

「人生は次の三重の方法で意味あるものとする事ができる。第一は、我々が何を人生に与えるかと言うことを通してであり(創造的仕事において)、第二は、何を我々がこの世から受け取るかと言うことによつてであり(我々が経験する価値において)、第三は、我々が改善の余地のない宿命に対してとる心的態度を通して(不治の病や手術不可能の癌、又はそれに類似した場合)である。」

(一九—二〇頁)